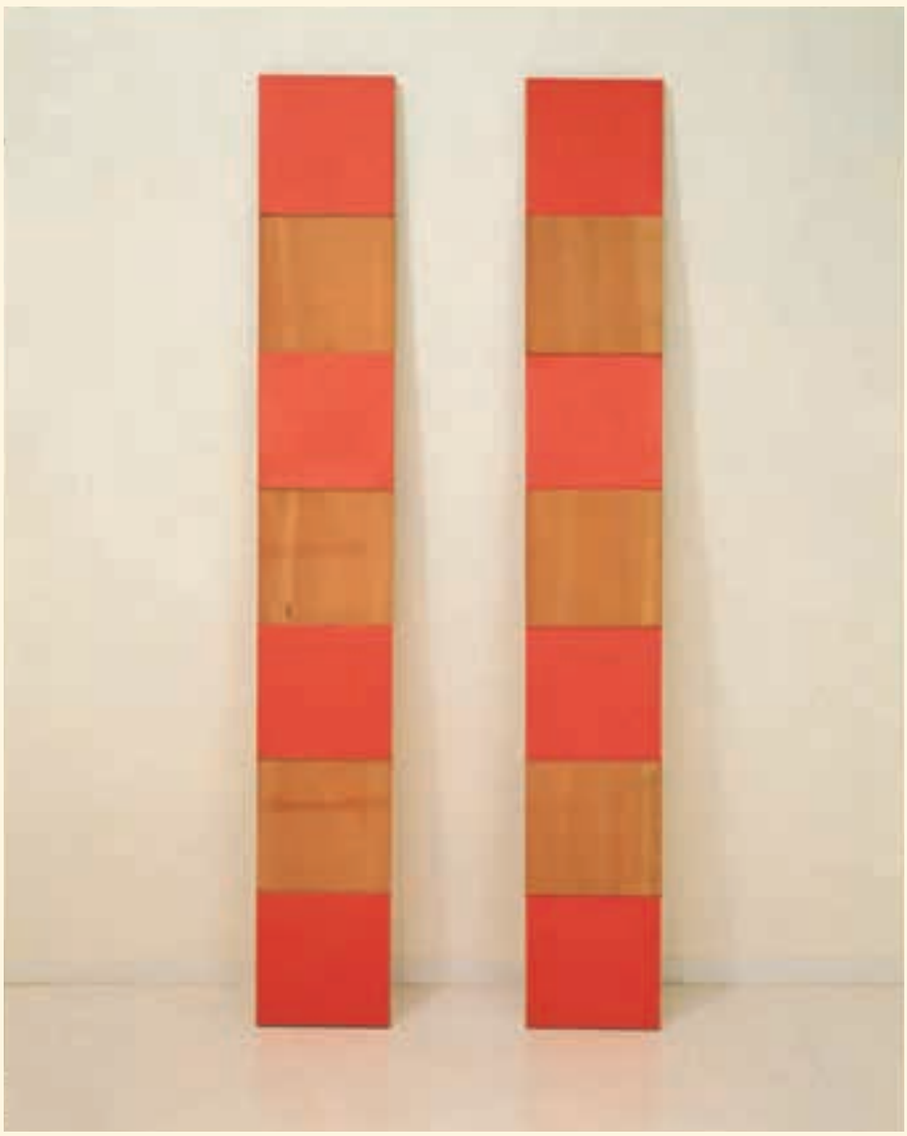
C'n
SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART
vol.44



八木正《中間子》1980年　千葉市美術館蔵

Topics

文承根＋八木正 1973-83の仕事

1970年代の美術 ―「文承根＋八木正 1973-83の仕事」展理解のために―

千葉市科学館開館記念協賛 星をさがして ―宇宙とアートの意外な関係―

逝きし芸術家を偲んで

文承根＋八木正 1973-83の仕事

MOON Seung-Keun＋YAGI Tadashi:

works on paper and sculptures 1973-83 from the two collections

文承根《Untitled［#92］》1978年　千葉市美術館蔵

京都を拠点に活動し、1980年代初頭に惜しまれながら逝去した二人の美術家、文承根（ムン・スングン 1947-82）と八木正（やぎ・ただし 1956-83）についての展覧会を開催します。本展は京都国立近代美術館と千葉市美術館の所蔵作品を中心に構成されるものであり、文承根と八木正の作品を網羅する回顧展ではありません。二人は1970年代から80年代初頭という、現代美術の転換期に示唆に富む作品を制作していました。しかし彼らの作品は十分にその意義が検証されることなく、四半世紀の時間が経過しました。

千葉市美術館と京都国立近代美術館は今日まで、ご遺族と関係者の努力により残されたこの二人の作品の研究と保存に努めてきました。二館の所蔵作品のみで構成される本展は、両館が続けてきた日常業務と作品研究の中間報告を兼ねたものであり、それぞれの所蔵作品展という性格を持っています。

（京都国立近代美術館の挨拶文を基に一部変更）

＊

文承根は1960年代末に世界的に有名な前衛美術集団「具体美術協会」の展覧会に参加。同会解散後は独自の表現を求め、京阪神地域を中心に個展を開催する一方、国内外のグループ展に出品していました。70年代に制作した、色を何層も重ねた水彩や、街の一瞬の光景を撮影した写真を素材とした版画作品は、その低くつぶやくような繊細さによって、当時を知るひとびとに今もなお回顧されているだけではなく、近年新たに若い世代の関心を集めています。

八木正は京都市立芸術大学在学中の1970年代後半より東京や関西の画廊で主に個展を通じて彫刻作品を発表していました。一枚の板に別の板をはめ込むような簡潔なスタイルを特徴とした作品は、当時の美術状況を反映している一方で、「巨大な無意識」とも呼べる工芸の範疇を脱して別の次元に立った日本の近・現代彫刻が積み重ねて来た造形思考に基づいています。

振り返ってみれば、1970年代という時代は海外からの美術の動向が紹介されながらも、どこか淡々としています。これは、ヴェトナム戦争や公害問題に象徴される事件で明らかなように、近代以来の進歩的発想や物質文明に対する反省が根底にあります。また、学生運動の崩壊は若い世代に自分たちと社会（この場合、現実と言い換えても良いかもしれません）との関わりを考え直すきっかけとなりました。声高に何かを叫ぶでもなく、「等身大の自己」という幻想からも無縁な彼らが、どのような制作をこころみたのか。これは、彼らの死後四半世紀ちかい時を経た現在の美術を考える一助となるかも知れません。

文承根と八木正の制作はいずれも病のために道半ばで中断してしまいました。今日のように若い世代のアーティストたちがジャーナリズムの脚光を浴びるような状況とは異なる1970年代、彼らがどのような思いによって自分たちの制作に向かっていたのか、遺された作品約50点でたどります。

［学芸係長　藁科英也］

文承根《活字球》1973年　京都国立近代美術館蔵

文承根＋八木正 1973-83の仕事

2007年9月23日（日・祝）▷11月4日（日）
10：00 ― 18：00（金曜日・土曜日は20：00まで）
＊入場受付は閉館の30分前まで
［休館日］　10月1日（月）
［観覧料］　一般　500（400）円
　　高校・大学生　350（280）円
　　小・中 学 生　無料
＊10月18日（木），20日（土），21（日）は市民の日のため無料
＊（　）内は団体30名以上・前売料金および市内在住60才以上
＊前売券は、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口（11月4日まで）にて販売

1970年代の美術ー「文承根＋八木正 1973-83の仕事」展理解のためにー

「文承根＋八木正 1973-83の仕事」と同時開催される所蔵作品展では、文承根と八木正が生きた時代について、彼らの先輩や友人、あるいは親たちの世代の作品によって紹介します。

展覧会は4つのコーナーに分かれています。

｜Ⅰ. 文承根の作品、その時代的な背景について｜

絵画を描くために用いられる紙やカンヴァスという支持体は、描き手のイメージを投影するスクリーンとしての役割を果たしていると、今日でもなお一般的には理解されています。同じように、「絵画は窓である」というたとえが用いられることもあります。

絵画を見てひとはさまざまな感情をかき立てられます。しかし、絵画というものは紙やカンヴァスと、その上に塗られた絵具のかたまりから成り立っていることについては、気がつかないようにしているといって良いでしょう。たとえば、日常の私たちは「紙」についてその厚みというものについてはあまり意識しません。しかし、液体や気体でない限り「もの」としての厚みは存在しています。

李禹煥《点より》1974年

1960年代後半の日本において、従来の絵画観や美術観を問い直そうとした動きが起こった時、紙は突けば穴があき、破ればその端には確かに断層がある、「もの」「物質」であるということが改めて認識されるようになりました。一見、当たり前のことではあるかも知れませんが、これは人間中心の西欧近代の物質文明に対する反省や異議申し立ての上に立っていました。李禹煥（イ・ウファン 1936生）はこのような作り手と物質の関わりの再検討をはじめとする従来の芸術観とは異なった視点によって60年代末以降の日本の美術に影響を与えました。

このような思索は李禹煥だけではありません。たとえば、1960年代に「影」の絵画によって知覚と認識のズレを明快に指摘した高松次郎（たかまつ じろう 1936-98）は先駆的かつ重要な役割を果たしています。彼が70年代に制作した《錆びた大地》（1977）では近代のヨーロッパで成立した「彫刻における要素間の関係」という概念が問い直されています。この作品で彼は本来作品の内部にあるバランスやエネルギーというものを目に見えるようにするために物理的な関係に置き換えていますが、これは「作品」が「もの」として存在することに対する基本的な問いかけに由来しています。

高松次郎《錆びた大地》1977年　高松靖子氏寄託

李禹煥や高松次郎たちによるこのような従来の芸術観に対する問いかけを経て、再び「作品」を「つくる」ことに向かった1970年代の美術には、ある特徴が見られます。それは、北辻良央（きたつじ よしひさ 1948生）や沢井曜子（さわい ようこ 1949生）の作品に顕著な、規則的な手法です。人間の規則的な反復作業のなかに生まれる不確定的な要素（微妙なズレ）のなかに「つくる」ことの意味を見出そうとするこころみは、文承根が遺した多くの水彩に共通する性格であり、不確定性は彼が活字を用いて制作した《活字球》（1973）において直接的なテーマとなっています。

｜Ⅱ. 京都・やきものの街｜

八木正が育った京都・東山区の五条坂は、現在でもやきものの街として知られています。彼は、この街で陶芸家・八木一夫（やぎ かずお 1918-79）の次男として生まれ、育ちました。父は1948年、前衛陶芸家集団「走泥社」を山田光（やまだ ひかる 1923-2003）や鈴木治（すずき おさむ 1926-2003）たちと結成し、正が生まれる2年前の1954年には現代陶芸の転回点ともなった《ザムザ氏の散歩》を発表しています。以後、「オブジェ陶」という新たなジャンルの第一人者として国内外の展覧会に出品しました。

八木一夫の《ホワイト・パンフレット》（1972）は、当時集中して制作された「本」および「パンフレット」シリーズの典型的な作品です。ここでやきものは薄い「面」として空間の中に存在しています。パンフレットとは言うものの、面のゆるやかな組み合わせと素材の緊張感は、前のコーナーで紹介した作家たちによるこころみといくぶん似通った意識すら感じさせます。今日では八木の作品について ーあるいは作家そのものまでもー 機智や諧謔といった側面ばかり語られるきらいがありますが、この作品では「陶」という素材をいかにして「作品」に変貌させるかという彼の意識、あるいは造形思考といったものが示されています。この思考は彼が急逝した後、山田光と鈴木治によって深められました。今回展示した山田の《黒陶 窓》（1981）も、空間の中の「面」という意識が示されている作品です。

八木の実家は文字通り五条坂の途中にありましたが、その坂を1,2分下ったところが彫刻家・清水九兵衛（七代六兵衛）（きよみず きゅうべい 1922-2006）の家です。彼の家は、代々「六兵衛」を名乗る陶家であり、彼の長男が八代目を襲名した現在にいたるまで五条坂を代表する存在です。1950年代半ばからの10年間、日展の新進陶芸家として活動していた清水は、60年代後半から抽象彫刻の制作をほとんど独自に開始しました。《Mask III》（1977）や《Wig 10》（1980）に見られる、立方体を基本としたボディと曲面のパーツの組合せは、互いの関係性のなかから新たな、作品そのものが有する存在感を獲得しており、彼独自の造形となっています。

清水九兵衛が1980年に大阪で個展を開催したおり、八木正は幼い頃から道ですれちがっていたであろうこの近所のおじさんの彫刻作品について、「造形力のたしかさにはかんぷくした」とメモに記しています。

福島敬恭《無題(1)》1979年

小清水漸《作業台－3点セット》1977年

| Ⅲ.「もの」「物体」と「作品」 |

このコーナーでは、二人の作家の作品を紹介します。

福嶋敬恭(ふくしま のりやす 1940生)は京都市立美術大学在学中の1960年代初頭から野外彫刻展に出品していましたが、64年から翌年にかけてアメリカに滞在し、当時新たな造形思考として知られていたミニマル・アート(最小限の美術)に深い関心を寄せることになります。

美術作品と一般の日用品あるいは工業製品などを分けるものは何か、という問題については20世紀前半にマルセル・デュシャン(1887-1968)が便器を展覧会に「作品」として持ち込むことによって、その境界はあいまいなものになっていました。これは、既製品(レディ・メイド)すら美術の「作品」であることを示したものです。逆に、ミニマル・アートは絵画や彫刻から様々な要素を取り去ってもなお日用品などとは違う純粋な存在物のあり方を探ったこころみでした。その結果として単純で均一、しかも作者の「手あと」すら消し去ることになりました。当館が所蔵する《無題(1)》(1979)は、福嶋敬恭のこのような造形思考への関心が最も良く示された作品です。

一方、小清水漸(こしみず すすむ 1944生)は多摩美術大学在学中の1967年より各種のグループ展に参加していました。彼は初期の活動の中から次第に、大きな紙の袋や巨大な石を扱った作品によって素材の「"もの"そのもの」の表情や存在感を示す作品を発表するようになります。

素材の「"もの"そのもの」の表情を示すということは、具体的には人間が「もの」の表面に対してなんらかの働きかけをするということです。小清水漸はこのこころみを「表面から表面へ」という名によって木やセメント、粘土など様々な素材の表面の特性を際立たせる作品に発展させました。紙とクレパスを用いた《表面から表面へ》(1971)では、かたまりであるクレパスが紙の表面に塗り付けられることで、紙が従来とは異なったもうひとつの表面を持つありさまが示されています。小清水は1973年の秋に活動の場を東京から関西に移しました。以後、彼は東京で活動していたころにくらべて作品の材料に適した木材が入手しやすかったこともあり、次第に木を扱った作品を多く制作するようになります。今回展示した《作業台―3点セット》(1977)や"Relief"のシリーズなどでは、彼の「表面から表面へ」という制作意識が続いていることがわかります。

| Ⅳ. 蝿 |

最後のコーナーでは村岡三郎(むらおか さぶろう 1928生)と若林奮(わかばやし いさむ 1936-2003)、二人の彫刻を紹介します。

1960年代初頭のほぼ同じ時期に二科会に在籍していた二人は、共に1950年代半ばより鉄を素材として彫刻を制作しています。その先駆性はもとより、1945年以降の現代日本彫刻のなかで、時流とは離れた場所で続けられた二人の制作は絶えず周囲に刺激を与えています。その彼らが、1960年代末から70年代初期に相次いで蝿を彫刻の素材として扱ったのです。

1969年、若林奮は三つの異なる野外彫刻展で蝿を題材とした彫刻を相次いで発表しました。今回展示する作品は、そのうちの2点(うち1点は現存する部分の展示)で、作品名に記された数字は発表された展覧会の会期を示しています。現在、東京国立近代美術館に所蔵されている彼の2,600点以上ものドゥローイングには、68年から翌年にかけて描かれた蝿のドゥローイングや精密な測定図が含まれています。そのなかには、周囲の空間や大気中の雨粒とぶつかる蝿が描かれているものなどがあります。彫刻家は蝿がいかに大気中を飛ぶか、という問いを手がかりとして、一箇の有機的な生命体と空間のかかわりについて考察し、彫刻の制作に向かっているのです。

村岡三郎の作品は、もっと直接的です。彼の《貯蔵－蝿の生態とその運動量》は、1972年6月28日から7月8日にかけて大阪の画廊で開催した個展で発表された作品です。一見したところ、ただの鉄の箱です。彼は会期中、蝿の幼虫を作品上部にある漏斗(じょうご)から投入しました。幼虫は鉄の箱の中で順次成虫へと成長し、死骸は下部の出口から排出されるように作られています。その数は385匹(その後、上部と下部の穴は封印されました)。観客は、生きた蝿をみることが出来ず、ただその死骸からのみ箱の中で蝿が「生きていた」ことを知ることになります。

二人の作品は異なった表現をとりながらも、生命というものをどのように人間が考えるかという点で一致しています。これはヨーロッパで確立した近代彫刻というものが「生命の表現」を目指し、人間像のみごとな表現を達成しながらも結局のところ、「生命そのもの」を表現出来ないというもどかしさにつながっており、彼らなりの近・現代彫刻批判となっているのです。

村岡三郎《貯蔵－蝿の生態とその運動量》1972年

［学芸係長　藁科英也］

1970年代の美術
－「文承根＋八木正 1973-83の仕事」展理解のために－

2007年9月23日(日・祝)▷11月4日(日)
10：00－18：00(金曜日・土曜日は20：00まで)
＊入場受付は閉館の30分前まで

［休館日］　10月1日(月)
［観覧料］　一般　200(160)円
　　高校・大学生　150(120)円
　　小・中 学 生　無料
＊(　)内は団体30名以上の料金
＊同時開催「文承根＋八木正」展のチケットをお持ちの方は無料

□千葉市科学館開館記念協賛

星をさがして

ー宇宙とアートの意外な関係

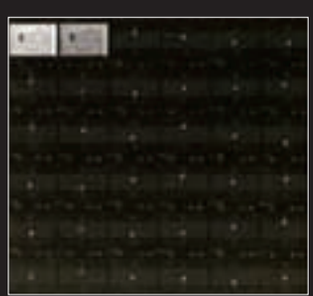
10月20日、千葉市美術館から徒歩5分のところにある複合施設「Qiball(きぼーる)」内に、千葉市科学館がオープンします。千葉市美術館では千葉市科学館の開館を祝し、開館記念協賛展「星をさがして－宇宙とアートの意外な関係」を開催します。Qiballのアトリウム上部に、惑星をイメージした直径26メートルもの巨大な球体(Ball)が浮かんでいますが、これが科学館のシンボル施設ハイブリッド型プラネタリウムです。このプラネタリウムと科学館の開館記念展「宇宙へチャレンジ ー君もいつか宇宙へ」にちなみ、美術館も所蔵作品から星と宇宙に関連する現代アートを選んで展覧会を行うものです。

科学番組やSF映画のおかげで、現在、宇宙はとても身近な存在となりました。100年前とは比較にならないほどリアルに、私たちは宇宙をイメージすることができるようになったのです。この数十年間、現代アートの作家たちもユニークな方法で、星や宇宙を自らの作品に取り入れてきました。ここでは本展の出品作のなかから、2点の作品を例として紹介しましょう。

科学館のプラネタリウムに対して、千葉市美術館では、展示室の床一面に天空を再現した宮島達男の大作《地の天》(1996)を展示します。《地の天》は、床に散りばめた青色LED(発光ダイオード)のデジタルカウンターを星に見立てた作品で、カウンターの数字が固有の速度で1から9まで切り替わる様は、まさにきらめく星々を連想させます。デジタルカウンターで宇宙の広がりと壮大な時の流れをあらわしたこのスケールの大きい作品は、サイズ自体も直径10メートル近くあり、千葉市美術館の所蔵品のなかでも最大の規模を誇ります。

真っ暗な展示室のなかで、星のようにきらめく青色LED。それらは開発段階でつくられた試作品であるため、通常のLEDよりもはるかに弱く儚い光を発します。そのためシャープでアグレッシブな宮島の他のLED作品と異なり、見るものに穏やかな印象を与えるのです。

《地の天》に使われているデジタルカウンター



野村仁《ムーン・スコア》1979年

宮島達男《地の天》1996年

野村仁の《ムーン・スコア》(1979)も、《地の天》に劣らずユニークな作品です。ある日通勤途中で空を見上げた野村は、電線と電線のあいだに挟まれた月が音符のように見えることに気づきました。この経験をもとに、あらかじめ5本の線を写し込んでおいたフィルムで月をランダムに撮影して、月の楽譜《ムーン・スコア》を生み出しました。野村は、月を音符に見立てたこの作品を実際にプロの音楽家に演奏させたCDも制作しています。撮影した月が楽譜のどの位置に写るかはあくまで偶然に左右されるため、これはまさに作者自身の意図を超えた偶然性の音楽と言えますが、今回展示室内でこの不思議な音楽をお聞きいただけます。

宮島の《地の天》にしても、野村の《ムーン・スコア》にしても、絵画や彫刻のような伝統的な美術の表現方法から大きく逸脱した作品と言えます。既製の美術の枠組みから解き放たれた現代アートは、2人の作品のように極めて自由で個性的な表現を次々と生み出しているのです。星と宇宙という身近なテーマを通して、現代アートならではの独創性に触れてみてはいかがでしょうか。

［学芸員　水沼啓和］

◎10月20日(土)、千葉市科学館が開館します。
詳細は千葉市科学館のホームページをご覧下さい。
http://www.kagakukanq.com

千葉市科学館開館記念協賛

星をさがして ー宇宙とアートの意外な関係

2007年11月11日(日)▷2008年1月6日(日)
10：00ー18：00(金曜日・土曜日は20：00まで)
＊入場受付は閉館の30分前まで
［休館日］　12月3日(月)、12月9日(日)(電気点検日)
12月29日ー1月3日(年末年始)
［観覧料］　一般　200(160)円
高校・大学生　150(120)円
小・中 学 生　無料
＊(　)内は団体30名以上の料金
＊同時開催「逝きし芸術家を偲んで」展と共通料金

柳原義達《黒人の女》1956年

毛利武士郎《手の中の眼》1957年

逝きし芸術家を偲んで

本展覧会は千葉市美術館に作品が収蔵されている現代美術部門の中で、この3年ばかりの間に亡くなられた方々の作品を展示し、併せてその業績を回顧するものです。出品作家は、柳原義達(やなぎはら よしたつ 1910-2004)、松田正平(まつだ しょうへい 1913-2004)、清水九兵衛(きよみず きゅうべい 1922-2006)、松澤 宥(まつざわ ゆたか 1922-2006)、毛利武士郎(もうり ぶしろう 1923-2004)、飯田善國(いいだ よしくに 1923-2004)、金山明(かなやま あきら 1924-2006)、土谷武(つちたに たけし 1926-2004)、由木礼(ゆき れい 1928-2003)、田中敦子(たなか あつこ 1932-2004)。各作家の紹介については、展覧会開催のおりに会場内のパネルで改めてその業績を具体的に紹介したいと思います。ここでは柳原を中心に、彫刻家について記したいと思います。

柳原義達は高村光太郎(たかむら こうたろう 1883-1956)亡き後の日本彫刻界にあって、文字通り背骨のような存在でした。彼の表現は終生具象的表現にありましたけれども、生前「彫刻は具象でも抽象でも同じ。“何ものか”が作品のなかに詰まっていなければならない」と語っていたように、抽象や具象といった表現形態を超えたところで、彫刻について考え続けていました。そのため、具象の彫刻家だけではなく若林奮(1936-2003)や土谷武といった抽象の作家たちをいちはやく支持し、はるかに年齢の離れた彫刻志望の若者たちを勇気づけていました。

柳原義達が語っていた「“何ものか”が作品のなかに詰まっていなければならない」ということばは、日本人が自分たちのことばで初めて語ることができた近代彫刻のエッセンスです。この理解があったからこそ、「1970年代の美術—『文承根＋八木正 1973-83の仕事』展理解のために—」で紹介した若林奮や村岡三郎の1960年代末から70年代初期のこころみ、あるいは70年代における八木正の作品が成り立っています。柳原の存在が、日本の近・現代彫刻における背骨であった理由です。

柳原義達をはじめ、毛利武士郎と土谷武は東京美術学校彫刻科の出身で、いわば彫刻を制作し、考え続けることを学校で訓練されていました。これに対して清水九兵衛と飯田善國は人生の中途から彫刻制作に向かっています。たとえば、飯田のばあいは1949年に慶応義塾大学を卒業後、同年東京藝術大学絵画科で梅原龍三郎(うめはら りゅうざぶろう 1888-1986)に油彩を学びました。彼が彫刻を制作することになるのは57年、留学先のローマにおいてです。

清水九兵衛と飯田善國に共通する点は、作品全体を構成する大胆な「かたち」の発想です。彼らの制作もまた日本の彫刻界に新鮮な刺激を与え続けたのでした。

［学芸係長　藁科英也］

土谷武《呼吸するかたちA》1992年

田中敦子《Thanks Sam》1963年

逝きし芸術家を偲んで

2007年11月11日(日)▷2008年1月6日(日)
10：00－18：00(金曜日・土曜日は20：00まで)
＊入場受付は閉館の30分前まで
［休館日］　12月3日(月)、12月9日(日)(電気点検日)
12月29日－1月3日(年末年始)
［観覧料］　一般　200(160)円
高校・大学生　150(120)円
小・中 学 生　無料
＊(　)内は団体30名以上の料金
＊同時開催「星をさがして」展と共通料金

Wi-CAN
Work in Chiba Art Network

今年も始まりました、Wi-CANプロジェクト

秋と言えば、Wi-CANプロジェクト。美術館ニュースでも毎年お伝えしているこのプログラムも、今年で5年目を迎えることとなりました。今年は、アートセンター Wi-CANPのある栄町(中央区)、千葉市美術館のある千葉中央地区、佐倉市立美術館のある佐倉地区、市内に戻って福祉施設と豊かな自然の残る千葉里山地区の4つの地域で、様々な活動が展開されます。今回は、9月最初の土曜日、栄町のアートセンターで開催されたオープニング・イベントの様子をお伝えしましょう。

この日は、これまでの活動報告とあわせて、地区ごとに編成された班でそれぞれ準備を進めている企画が紹介されました。今年度は、市による「社会実験」が栄町で行われることもあり、アートセンターの活動は昨年にも増して活発なものになりそうです。大学と商店街と市の連携によって、JR千葉駅からも美術館からも近い栄町の商店街で実施される、実験的なプログラムの数々にご注目ください。

さて、市美術館のアウトリーチ・プログラムとなる千葉中央班の企画ですが、今年は美術館へのアクセスの難しさに着目します。区役所と同居するユニークな美術館ではありますが、行き方がよくわからない、美術館の入り口(1階)から展示室(7階)までの道のりが遠い、とのお叱りを受けることもしばしば。遠いのは、物理的な距離だけ？という問いも胸に、地域や市民の方々との間にある距離の問題に挑みます。

Wi-CANP外観

オープニングの様子

今年のプロジェクト全体のテーマは、Beef ？ Chicken ？ or Art ？というもの。このテーマには、次のような文章が添えられています。

ビーフにしますか？チキンにしますか？
いえ、そんなお決まりの選択じゃなくてアートはいかがでしょう。
きっとフライト後にも、永くあなたのココロの栄養源となってくれるはずです。

Wi-CANプロジェクト、覗いてみませんか。
→http://www.wican.org/

ボランティア日和
episode14

小さい頃、教科書に載っていた高橋由一の《鮭》の絵に出会い、本物を見たいと思ったことが、私が美術館に行くきっかけとなりました。当時、母が鮭を吊し切りにするのを見ていたので、由一の《鮭》を絵とは思えなかったのです。けれども私が住んでいたのは田舎でしたから、現在と違い近くに美術館などありませんでした。(札幌に道立美術館が開館したのは、私が北海道を去ったあとの昭和52年です。)

昭和46年、夫の転勤で上京し、日本の首都東京に近い津田沼に住むことになって、「しめた」と思いました。そして機会を作っては美術館へ足を運びました。思い返すと、単に美術館へ行って、ただ絵を見ただけだったかもしれません。それからだいぶ月日がたって、東京藝術大学に美術館が開館し、ついに《鮭》の本物を見ることができたのでした。「由一描く鮭の絵見んと、美術館に二時間待つも楽しかりけり」の心境でした。吊り下げた縄の質感、切り取られた身の軟らかい切り口、色艶、小骨の一本一本、わずかに乾く表面、飛び散り輝く鱗、絵とは思えず驚きたたずんでいました。

現在千葉市では授業の一環の鑑賞教育として、年間20校程とわずかですが、子供たちが美術館へ来ます。子供のころから本物を見る機会に恵まれ、とても羨ましいと思います。そのような機会に子供たちと一緒に絵と向き合い、まず見えることから見ていこうということで、顔の表情や季節感など絵について一言でも発してもらおうと四苦八苦します。帰りには、課題とはいえ、子供たちはお気に入りの1点を見つけ爽やかな顔になります。彼らもいつか、私の《鮭》のような、心の安らぎや励ましとなる1点を見つけてくれたらと思います。

またギャラリートークでは、拙い話ですが、少しでも聞いて良かったとおっしゃるお客様に後押しされながら、ボランティアとしてお手伝いさせていただいています。

私を呼び止める1点をぜひ千葉市美術館で、と願っています。

［美術館ボランティア　八代陽子］

◎都市のフランス自然のイギリス展　2つの小中学生向け鑑賞プログラム大好評！

「中学生のためのギャラリークルーズ'07 時間旅行〜革命から鉄道と万博の時代へ」
8月12日（日）と26日（日）午前午後

2日間で60人の参加がありました。中学生だけでの鑑賞をサポートする、待ち受け型のプログラム。いったい何人の中学生が来てくれるのか、鑑賞リーダーたちはドキドキしながらスタンバイしていましたが、美術館へ行くのが宿題、という近隣の中学校を中心に、去年よりずいぶん多い子どもたちを迎えることができました。

「ふぁみ★くる〜ず 絵の中の森へピクニックに行こう」
8月13日（月）と25日（土）午後

計2回の実施で8組の参加がありました。鑑賞リーダーと一緒に全員で作品（ポール＝カミーユ・ギグー《牛の渡し場》）を鑑賞した後、親子ペアになり、展示作品の中からピクニックに行きたい場所を探しました。その後、ワークシートをもとに、選んだ場所について、「誰と行きたいか」「何をしたいか」「何を持って行きたいか」「自分はどこにいるか」など、その作品の前で発表してもらいました。

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度は近世から現代まで、さまざまな時代のアーティストたちについて当館スタッフが毎回わかりやすく解説します。参加は無料です。

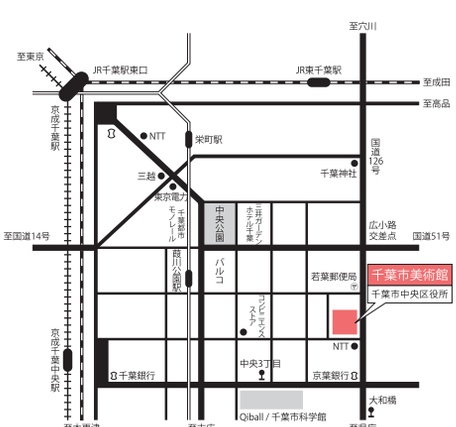
［時　間］14：00より（開場は30分前）
［場　所］千葉市美術館11階講堂
［定　員］先着150名（入場無料）

○ 第4回　9月29日（土）「酒井抱一 －200年前の展覧会－」
［講師］松尾知子（本館学芸員）

○ 第5回　10月27日（土）「八木正 －彫刻とは何か－」
［講師］藁科英也（本館学芸係長）

○ 第6回　11月24日（土）「星をつくる／星をみる－宮島達男と野村仁にとっての宇宙」
［講師］水沼啓和（本館学芸員）

○ 第7回　12月15日（土）「清水九兵衛 －戦後を生きる－」
［講師］藁科英也（本館学芸係長）



［交通案内］
◎JR千葉駅東口より徒歩約15分
○千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分
○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
◎東京方面から車では、京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
◎地下に駐車場があります

［編集・発行］
千葉市美術館
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp
［発行日］2007 年 9 月 27 日
［印　刷］半七写真印刷工業株式会社

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art